The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代フランス語におけるkamikaze の変遷
Author(s)	中尾, 雪絵
Citation	Gallia. 2018, 57, p. 3-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69845
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代フランス語における *kamikaze* の変遷

中尾　雪絵

1. はじめに

外国語起源のことばが新しい文化に根付くと、元の意味を離れて独自の発展を遂げることがある。たとえば、フランス語となった日本語起源の語の *zen* は、名詞であるとともに形容詞化した。そして、日常のフランス語の中で、*soyez zen* のように、「落ち着く」という意味合いで使われるようになっている。*zen* は「禅」の宗教的な概念からインスピレーションを受けてフランス語化し、新たな意味をまとうようになったのである。

本稿が取り上げるのは、*zen* と同じく、フランス語に定着し、その意味を広げていった日本語起源の借用語 *kamikaze* である。*kamikaze* の歴史は、決して短いものではなく、1950 年代にはフランス語の中に初出している。*zen* が時代とともに意味を広げ、90 年代には流行語となって、今でも主に bien-être の範疇で商品名などに使われているのに対して [1]、*kamikaze* は社会において、どちらかといえば異端な要素を表しながら発展してきた。そして近年、この言葉は特に不安定な世界情勢、そしてフランスの社会を写し出しているように思われてならないのである。そこで前稿 [2] に続き、本稿もフランスの新聞記事に見られる語の使用を参照しながら、現代フランス語における *kamikaze* の解釈を検討していきたい。新聞を主な分析対象とするのは、社会情勢や日常の文化的な側面など、言語の様相と深く関わる部分を時系列で捉えることができるからである。なお、引用記事は、電子アーカイブを利用し、必要に応じて、アーカイブ内に保存されている当日の紙面も参照した [3]。

2. *kamikaze* と呼ばれるテロリスト

今日、フランス語の中で使われる *kamikaze* は、自爆テロを行うテロリストを指すことが圧倒的に多い。

> イラク戦争中（2003 年～ 2011 年）、スンニ派のしきたりにより自殺は罪とされているにもかかわらず、こうした殉教思想が広がっていった。宗教者たちも、カミカゼ殉教者を聖戦への参加行為として認めた。（ル・モンド紙、2016 年 1 月 6 日）

1）*Dictionnaire historique de la langue française*, « zen », Dictionnaires Le Robert, 2010.
2）Yukie Nakao, « Le mot *tsunami* dans le français contemporain », *Gallia*, 56, 2017, p. 21-30.
3）http://www.bpe.europresse.com

ここで使われているカミカゼ殉教者（le martyre kamikaze）は、できるだけ大きな「成果」を挙げるため、テロリストとしての素性を隠し、市民生活の不意を襲う。その不意打ちのイメージを表現するのが、日本語起源の *kamikaze* なのである。

ル・モンド紙の電子アーカイブで *kamikaze* の使用状況を調べてみると、「自爆テロリスト」としての意味は 1980 年代にも 1990 年代にも見られるが、使用回数が爆発的に増えるのは、2001 年にアメリカで起きた同時多発テロからである。言語学者のマリー・トレプスは、『旅する言葉』において、次のように述べている。

> *kamikaze* は日本に起源をもつ語で、第二次世界大戦中、日本の志願兵が行った飛行機による体当たり攻撃を指す。つまり、地域的・歴史的に限定された語なのである。にもかかわらず、この用語は最近になって再び使われるようになってきた。それは、日本でも戦争でもない新たなコンテクスト、すなわちアメリカで起きたツインタワーのテロ事件がきっかけである。（マリー・トレプス、『旅する言葉たち』、338 頁 [4]）

つまり、限定的な意味合いで使われていた *kamikaze* が、同時多発テロをきっかけに自爆テロを一般化する言葉に変化したととらえることができる。実際、ル・モンド紙を例にとると、1996 年から 2000 年まで、*kamikaze* が紙面に登場する回数は、年 20 回にも満たなかったのだが、2001 年になると、その数は 100 回近くに増える。2001 年のル・モンド紙に登場する *kamikaze* のうち、9 割は自爆行為による「テロリスト」の意味で使われていた。2001 年以降、*kamikaze* の出現数は増減を繰り返しながらも、常に「テロリスト」としての意味が大多数を占めたまま、今日に至っている。

アメリカの同時多発テロでは、テロリストが旅客機を操縦し、自らの命を犠牲に世界貿易センターに激突するなどして、多数の死傷者が出た。その実行犯たちが *kamikaze* と呼ばれた。自ら操縦する飛行機でアメリカ戦艦へ突っ込んだ日本の特攻兵と、2001 年のテロリストとは同列に並べられたのである。この解釈に違和感を覚える日本人の姿が、事件から数年たってもフランスのメディアに登場する。

> 私はパリに住んで 2 年になる日本人です。*kamikaze* という言葉が自爆テロリスト、特にイスラム過激派（4 月 6 日付ル・モンド紙）を指して使われることが多いので、衝撃を受けています。（...）日本人飛行士が愚かだとか、軍国主義にどっぷりはまっていた、あるいは軍国主義の犠牲者だったなどと思われるのは構いません。しかし、特攻隊とイスラム過激派のテロリストを比べることはできません。神風特攻隊は、任務についていた 1 ヶ月間、アメリカの戦艦だけを狙っていたのであって、市民は狙っていないのです。（ル・モンド紙・読者欄、2004 年 4 月 14 日）

4）Marie Treps, *Les mots voyageurs : Petite histoire du français venu d'ailleurs*, Seuil, 2003.

自分たちの歴史や文化から生まれた言葉がこのような使われ方をすることに憤る日本人も少なくなかった。（ル・モンド紙、2007 年 2 月 15 日）

しかしながら、日本側の言い分が言語の運用を変えることはなかった。それどころか、*kamikaze* は現代のテロリストを象徴する単語として、皮肉な発展を遂げていく。テロ事件の後、自爆テロリストをカミカゼと呼ぶ傾向は定着し、今では辞書にも掲載されている。プチ・ロベール辞典が、「テロリスト」の定義を *kamikaze* に加えたのは、同時多発テロの翌 2002 年に発行された 2003 年度版においてであった [5)]。こうした言語現象を理解するのに、言葉の背景を無視することはできない。世界のあちこちで相次ぐテロが報道されるたび、外国起源の *kamikaze* はテロリスト（terroriste）という言葉以上に強烈なインパクトを与えたのだろう。と同時に、*kamikaze* はイスラム過激派など特定のテログループを端的に表現する言葉になっていく。以下の引用は、フランス語における *kamikaze* の意味の変遷をまとめた 2002 年の記事の抜粋である。

（カミカゼという）語の意味は広がり、テロで自分の命を投げ出すテロリストを指すようになっている。この使われ方が、ここ数年で悲しいほど有名になった。使用が増えるのに比例して、テロリストの動きも変遷している。多くの男女が、死ぬことを事前に理解したうえで、テロ行為に及ぶようになっている。（ル・フィガロ紙、2002 年 7 月 6 日）

そして、週刊紙シャーリー・エブドの編集部を襲った 2015 年のテロ事件、同年 11 月にパリの劇場バタクラン等で起きた惨劇の報道において、フランスのメディアはやはり *kamikaze* を多用する。

サン・ドニを襲撃した 3 人のカミカゼの 1 人は、今年初めから入国している約 50 万人の移民と同じ足取りをたどっていた。
（ル・モンド紙、2015 年 11 月 17 日）

フランス国内では、IS に感化され、シリアへ渡ろうと企てたり、実際に渡航を果たしたりした若者も多い。2016 年 3 月 6 日付のル・モンド紙は、シリアへ渡ろうとした未成年の少女たちの携帯電話でのメッセージのやりとりを再録している。この記事に登場するカミーユは 15 歳、ファティマは 19 歳である。

カミーユ：つまり、フランスでカミカゼで自爆するの。神の思し召しで、ここを出られたらね。
ファティマ：カミカゼって？
カミーユ：爆弾を使って自爆するってこと。

5）ロベール辞典編集部からの回答による（2017 年 11 月 2 日）。

（ル・モンド紙、2016 年 3 月 6 日）

カミーユが使った *kamikaze* という言葉をファティマは知らず、意味を尋ねる。これに対し、カミーユは、爆弾を使って自爆すること « [t]u te fais sauter avec une bombe» だと答える。カミーユの理解している *kamikaze* が、英雄的行為としての自爆テロであることは、得意そうに答える様子からも明らかである。

kamikaze という語が使われる背景には、外国語だからこその手軽さもあるだろう。日本語でも、英語の過剰な使用が問題になることがあるが、自国の言葉よりも直接的でない外国語を使うことで、言いにくい内容が言いやすくなるような効果もある。借用語が思わぬ形で意味を広げていく背景には、そのようなあたりの良さもあるのかも知れない。

3. *kamikaze* の意味の変遷

以下の表は、プチ・ロベール・フランス語辞典における *kamikaze* の定義を、大きく意味が変わった版ごとにまとめたものである。ここでは、便宜的に第一世代、第二世代、第三世代の 3 つに分け、それぞれの世代のサンプルとして、1970 年版、2000 年版、2016 年版に記載された定義を引用した [6)]。なお、辞書を刊行しているロベール辞典編集部によると [7)]、*kamikaze* という語は 1967 年のプチ・ロベール初版から入っているという。この語がフランス語の中に浸透していったのは、プチ・ロベールの初版より古い 1950 年代となっているので、すでに 70 年近い年月が経っているわけである。

まず、*kamikaze* の発音は [kamikaz] で、phase や case と同様、語末が [-αz] となっているが、現行の発音は 1989 年からで [8)]、それまでは日本語の発音と同じ [kamikaze] であった。つまり、最初は日本産の語として発音に修正を加えずに辞書登録され、時間の経過とともにフランス化していったといえる。

品詞も変化している。当初は「男性名詞」であったのが、現行の第三世代の定義では「名詞・形容詞」となっている。第二世代の定義でも形容詞としての使われ方が掲載されているが、正式に「形容詞」となったのは第三世代に入ってからである。名詞が形容詞としても使われる語は、他にも *zen* や *nippon* などがあり、使用頻度の高い借用語に適用される傾向がうかがえる。

語源については、1970 年版では日本語起源であることが明記されているのみだが、第二世代の 2000 年版からは vent divin が加わっている。

最後に、*kamikaze* の意味については、時代とともにその内容が少しずつ増幅している。3 つの世代を通して変わらないのは 1 つ目の « [a]vion-suicide... ce volontaire» の部分である。avion-suicide は、いうまでもなく日本軍による特別攻撃隊を指す。また、ce volontaire とあることから、フランス語の *kamikaze* は、飛

6）*Le Petit Robert*, 1970, 2000, 2016.
7）ロベール辞典編集部からの回答による（2017 年 10 月 4 日）。
8）同上。

表：プチ・ロベール辞典における *kamikaze* の定義の変遷

年	1970	2000	2016
発音	[kamikaze]	[kamikaz]	[kamikaz]
品詞	nom masculin	nom masculin	nom et adjectif
語源	vers 1950 ; mot japonais	vers 1950 ; mot japonais «vent divin»	vers 1950 ; mot japonais «vent divin»
意味	Avion-suicide, piloté par un volontaire（au Japon, en 1944-1945）; ce volontaire.	Avion-suicide, piloté par un volontaire（au Japon, en 1944-1945）; ce volontaire. *Des kamikazes.* **PAR EXT.** Personne d'une grande témérité. *Un «kamikaze du volant»*（Nouv. Obs., 1969）. **Adj.** Qui tient du suicide. *Une opération kamikaze.*	1）**Nom masculin** Avion-suicide, piloté par un volontaire（au Japon, en 1944-1945）; ce volontaire. *Des kamikazes.* **Nom** Auteur d'un attentat suicide. *Le kamikaze a déclenché sa bombe dans le bus. «Que pouvait-il encore arriver ? Qu'un kamikaze se fasse exploser un soir au bar où ils prendraient un verre»*（C. Cusset）. 2）**PAR EXTENSION** Personne d'une grande témérité. *Un kamikaze du volant.* 3）**Adjectif** Qui tient du suicide. *Une opération kamikaze.*

行士による玉砕飛行（行為）とともに特攻隊員（人）も意味することがわかる[9)]。

第二世代になると、2つ目の意味が定義に加わる。«personne d'une grande témérité» というもので、軍事行為とは関係なく、特攻隊員の玉砕が象徴するような無謀な性格を比喩的にとらえたものである。また、形容詞化した語の使用例として、«[u]ne opération kamikaze» が挙げられている。

現行の第三世代になると、1つ目の意味から派生した「テロリスト」という解釈が加わっている。前節でみたアメリカにおける同時多発テロの影響と考えられる追加項目である。テロリストの中でも、自己の命を犠牲にして遂行されるタイプのテロ行為を行う者を意味する。

プチ・ロベール辞典の定義の変遷を見る限り、語の「使用」に重点を置いた定義が付与され、日本語の「神風」との関連については語源であること以上の説明

9）これと似たような借用語に *sumo* がある。*sumo* は、日本の «lutte japonaise»（格技）であると同時に、«lutteur de sumo»（競技者）を指す。ただし、*sumo* の定義には、«on dit aussi sumotori»（*Le Petit Robert de la langue française*, 2016）という説明も添えられており、日本語の語源により忠実な一面がある。

はないが、『フランス語教養辞典』[10] は「13 世紀の元寇を神意によって止めたとされる台風の名前」と説明しているほか、『プチ・ロベール固有名詞辞典』[11] は、元寇の際の台風につけられた名前が「1941 年から 1945 年の戦争の際、飛行機もろとも玉砕した日本のパイロット」を指すようになったと言及している。このほか、ラルースの『外国起源語辞典』[12] においては、元寇の際に日本を救った台風が「カミの介入によるものだと考えられた」という記述が見られる。

4. 神風と *kamikaze*

ここで、日本語における「神風」の定義を見ておこう。『広辞苑』[13] によると、「神風」は「神の威徳によって起るという風。特に、元寇の際に元艦を沈没させた大風をいう」とされている。また、2 つ目の意味として、「第二次大戦中の特攻隊の呼称」、そして 3 つ目の意味として「転じて、命知らずで向こう見ずなさま。『―タクシー』」となっている。

『広辞苑』が言及する元寇の大風伝説は、広く知られたものだが、その真実性に疑問を投げかける研究もある。服部英雄は 2 度の蒙古襲来のうち 1274 年の文永の役の際のモンゴル軍の早期撤退説を否定している[14]。また、1281 年の弘安の役の際には、台風ではなく、戦いこそが日本に勝利をもたらしたのであるとする。「神風」伝説は、第 2 次世界大戦時の戦意高揚のためのプロパガンダであった。そのことは、神風特攻隊の存在だけでも明らかである。当時の戦況は、元寇と同じく、日本にとって厳しいものだった。体当たりによる「神風特別攻撃隊」を編成したのは、追い込まれた日本海軍だった。爆弾を敵にぶつけて帰還する通常の攻撃とは異なり、爆弾とともに機体もパイロットも犠牲になるという「決死隊」であった。編成に関与した当事者は、その時の経緯について、次のように回想している。

> その時、ふと思いついて、『神風隊（しんぷう）』というのはどうだろう？』と云った。すると玉井副長は言下に『それはいい、これで神風（かみかぜ）を起こさなくちゃならんからなあ！』と賛成した。（猪口力平・中島正、『神風特別攻撃隊』、53 頁[15]）

こうして、苦しい状況を打破するために編み出された特攻隊に、若く優秀な隊員が動員された。彼らの勇気は、当時の新聞などで讃えられた。しかし、最初こそそれなりの成果を上げたものの、米軍の特攻対策が進むにつれ、命中率は下がり続ける[16]。資材も人材も不足し、パイロットの訓練もほとんど経験していない若者が、整備の行き届かない機体に乗り込み、次々と飛び立つようになっていっ

10）*Dictionnaire culturel en langue française*, Dictionnaires Le Robert, 2005.
11）*Petit Robert dictionnaire encyclopédique des noms propres*, Dictionnaires Le Robert, 2007.
12）*Dictionnaire des mots d'origine étrangère*, Larousse, 2009.
13）『広辞苑』、岩波書店、第 4 版、1995 年。
14）服部英雄『蒙古襲来』、山川出版社、2014 年。
15）猪口力平・中島正『神風特別攻撃隊』、日本出版協同株式会社、1951 年。
16）栗原俊雄『特攻―戦争と日本人』、中公新書、2015 年、149 頁。

た[17]。航空機以外でも、人間魚雷と呼ばれた回天など、死を前提とした特攻作戦が次々と編み出され、敗戦まで続けられた。

戦後、「神風」という言葉は、『広辞苑』が引用している「神風タクシー」のような使われ方をした時期があった。タクシーの黎明期であった昭和30年代、競争率が激化する中で、売り上げを伸ばすため高速で突っ走るタクシーを形容して使われた言葉だという。しかし、今では乱暴運転のタクシーを神風タクシーと呼ぶことはないだろう。

今日の日本社会において、「神風」が日常的に使われる機会は多いとは言えないが、フランスの言語使用と同じく、新聞に着目すると、例えばあるスポーツ選手が「ファンの力に助けられて『神風』が吹いて優勝できた」と述べている（読売新聞、2017年10月21日）。「自分でも、何が起きたんだろうと思うほど圧巻のレース」（同）というコメントもあることから、思った以上の好結果であったため、「神風」という言葉になったと考えられる。このような「神風」の使われ方は、スポーツや芸能・政治・経済・産業・政治などの分野にもみられ、いずれも、元寇の大風がもたらした勝利、つまり奇跡と同じようなコンテクストで使われている。

こうして日本語の「神風」とフランス語の *kamikaze* を比べると、その使用が完全に一致するものではないことがわかってくる。そもそも日本語の「神風」は、自然現象の「風」と「神」が結びついた文化的要素が濃い。共起する動詞が「吹く」であることからも、日本語における神風は「風」に属している。これに対し、フランス語の *kamikaze* には「風」や「神」としての語使用はなく、意味としては決死隊のイメージが中心となっている。

2015年にフランスで日本の特攻隊についての研究書『カミカゼ』が出版された。著者らは『広辞苑』の「神風」の定義に触れ、*kamikaze* をめぐる日本とフランスにおける解釈の違いについて次のように述べている。

> ここからわかることは、日本語の定義には、志願とか犠牲などの概念がまったく含まれていないということである。玉砕への言及もない。（…）つまり、日本人が「神風」と聞いて考えることと、西欧の人間がカミカゼに付与した意味合いとの間には一致するものがないのである。（コンスタンス・セレニ、ピエール＝フランソワ・スイリ、『カミカゼ』、32頁[18]）

ここで問題になっているのは、特攻隊員が志願したのかどうかである。確かに、プチ・ロベールの定義では、«[a]vion-suicide, piloté par un volontaire» となっているが、『広辞苑』にも『日本国語大辞典』にも特攻隊の「志願」に関する言及はない。先に引用した『神風特別攻撃隊』の作者らは、若者たちの志願によるものであったと記述しているが（前掲書、52-53頁）、実際には強制による「志願」もあっ

17）栗原俊雄「神風特別攻撃隊」の本当の戦果をご存じか？　一隻撃沈のために、81人の命が犠牲に…」、『現代ビジネス』、2016年11月6日配信　http://gendai.ismedia.jp/articles/-/50088（2017年10月18日参照）

18）Constance Sereni et Pierre-François Souyri, *Kamikazes*, Flammarion, 2015.

たという（栗原俊雄、前掲書、142-143 頁）。志願した者もいれば、強制されたと感じて離陸した者もいただろう。どちらも真実である。だが、フランスに渡り、フランス語の仲間入りをした *kamikaze* はそのような曖昧さを持たず、「志願して」行う行為とされた。そう考えると、*kamikaze* にテロリストという新たな意味合いが加わった背景には、「志願した」という条件が大きく関わっているように思われるのである。

5.「向こう見ずな行為」としての *kamikaze*

ここまで見てきたように、*kamikaze* は文化的な側面における「神」とも「風」ともかかわりを持たずにフランス語の中に浸透していった。「テロリスト」という意味合いが今ほど強くなっていないころから、« [p]ersonne d'une grande témérité » という別の解釈も発展していた。この使用法がプチ・ロベールに書き加えられたのは 1977 年なので [19]、初出からわずか 10 年で新しい意味合いが生まれていることになる。*témérité* はプチ・ロベール辞典で « disposition à oser, à entreprendre sans réflexion ou sans prudence » と定義されている。『広辞苑』の定義にあった「向こう見ず」と同じ考え方だろう。だが、日本語での「向こう見ず」が神風タクシーという一過性の現象に留まっているのに対し、フランス語の *kamikaze* は一般化し、スポーツ選手のがむしゃらな様子、芸術家の思い切った作風、思春期の子どものふるまいなど、様々な場面で使われている。次の引用は、ラグビーの日本チームについて報じるル・フィガロ紙の記事である。ニュージーランド出身のコーチを迎えるなどして、チームが強化されていることを紹介したあと、記事は次のように続く。

> カミカゼ的である。だが、結果は鳥肌ものだ。というのも、この夏、日本チームは、ワールドラグビー パシフィック・ネーションズカップにおいて、トンガ、フィジー、サモアを抑えて初めて勝利を収めたのである。（ル・フィガロ紙、2011 年 9 月 9 日）

ここで形容詞として使われている *kamikaze*（« Ça peut sembler kamikaze »）には、筆者の驚きが込められている。ニュージーランド出身のメンバーを日本チームに迎えてチーム強化をねらった日本の作戦は向こう見ずととらえられたのである。

インタビュー記事や人物評では、「～はカミカゼである」「～はカミカゼではない」といった表現がよく使われる。

> トニー・ブレア氏はカミカゼではない。（ル・モンド紙、2000 年 1 月 5 日）[20]

19）ロベール辞典編集部からの回答による（2017 年 10 月 4 日）。
20）記事は「ユーロ嫌い」のブレア首相について取り上げている。

「[…] 実際のところ、通信系のカミカゼは、マルタン・ブイグであって、グザビエ・ニール（フリーの創立者で、ル・モンド紙の個人株主）ではない」と有識者はいう。（ル・モンド紙、2014 年 6 月 13 日）

このような使われ方、つまり戦争とは異なる文脈で、無謀で大胆な性格を形容して使われる *kamikaze* は、いわば語の平和利用のようなものである。「テロリスト」の意味が主流になった現在も、性格を形容する使われ方は消え去ってはいない。そこには外国語としての自由な解釈が、日常的な使用を定着させるまでになっていること、そして 1 つの単語が、意味の異なる定義を複層的に有する傾向の強いフランス語という土壌が理由にあるのではないだろうか。

6. 終わりに

本稿は、フランス語における日本語の借用語から *kamikaze* の意味の広がりについて、検討してきた。フランス文化という土壌で育った *kamikaze* は、時間とともに日本語の元の意味と異なる自由な解釈を得て、日本語よりも幅の広い言葉になった感がある。日本人や日本文化との間に生まれる違和感は、*kamikaze* がフランス語として機能していることを物語るものだろう。この語に限らず、借用語のたどる「人生」は、元の言語におけるそれとは、違ったものになる可能性を含んでいる。また、そうした柔軟性があるからこそ、時代を超え、文化の違いを超えて、使われ続けることにもなるのだろう。*kamikaze* は、戦争やテロなど、人類を分断する世界を形容する語として、社会情勢の影響を大きく受けてきた。分断が起これば、イデオロギーも異なってくる。前述の『カミカゼ』は、日本の特攻隊員について次のように述べている。ここで使われている「彼ら」（ils）は、引用部分より前のところに出てくる「こうした若い人たち」（ces jeunes）を指している。日本兵のことを語っているのだが、同時に、自爆テロを実行しようとする現代のテロリストの姿が垣間見えるように思えてならないのである。

ある人たちにとっては、彼らは英雄である。彼らは、礼儀正しい若者たちで、祖国のために自己を犠牲にして、気高く、かつての日本の侍の精神を受け継いでいたからである。それ以外の人たちにとっては、彼らは、命取りな国家のイデオロギーに操られたコマ以外の何物でもない。（コンスタンス・セレニ、ピエール＝フランソワ・スイリ、前掲書、244-245 頁）

（ナント大学外国語外国文化学部専任講師）